







13  
1638  
1

國兵

蘭

由出探毒序

列女傳如訓を事等上は女國女存  
女未成まゝに裁少あをた利探た  
是皆古民のしりし由能ふ無受  
とあめくまらたはた世をた  
かし申務事有少は  
秘しに度まはた人

蘭  
一  
)



ふー迎車中見ゆ路一と先控る  
お悪む人余まてせく己事しぬ  
善其如欲自之宜事家者有  
種一と操茶と類人

徳和抄

徳和之成買



當世操車惣目錄

卷之一

福徳屋敷在場の俵が支



家脈乃が藤つ及十九人之  
船風さむく同れさるる様  
かくぬ衣と書く同  
周と中とて聲と呼ぶ

巻之二

唐和屋敷在場の娘事

唐和屋敷



卷之三

浮橋粉母妻女之事

むしりし以顔の向合ふに終勝  
児多かきやあ乃婚禮  
むと及理を嘆く義の一字  
磨てもなけぬと垢の令務

卷之四

物初新花娘あ弓事

毒吟を四紙杯がれと礼と深  
ふひとりなくゆり乃下々風  
刃と捨ててお花を浮む瀬で橋を  
押のちねが花(おー)こむ

卷之二

お弓女智と出世の事

おまはるくお世のさゆらおま

浮橋粉母妻女之事



江戸もさきれ女一又  
源氏も是祓の智書り  
茶ゆれ末も存ぐとせふ衆

當世採車卷之巻

後世を憂は侍の侍が事

家と貴とい人の教は下なり人万づつ早業といふ  
と誰よりさ世好むらんをさす一は江戸の眼といふ  
昨日は橋をよ後世を憂は侍が事  
子賢少く支ぬが中子唯ひとり家への心とめて懐  
とて育とるをさるる慰撫も及ぬ結核もくめえり母  
子て四方付りく人も後世にれいお親に冠帯を穿も  
され申十六歳までお終は角切入をたて尻がりあは  
業卒と函儀乃許判を乞はれあり也とらん丸丸

原書上



氏はたお尋ねなごう梅へて音京へ連絡し自負此  
例しそ女部が男付おのを去るも又男部は去る事  
敷く全張代を換割へ至款内へ改訂初程、其由も  
先はおほいさおこしりお換割多たが先おほいさ  
が入率改事社引連てのる康をひは款の言つてもなく  
しはは先でハ漱まひとさる氏は一列して親父多た  
急交折延び初て肝と流がし引きて敷者又ん志をれ  
たいくらも有事までをりそりていさあぬ色の存  
計は方とられ今ハ是地をく懸めれおしおしそ  
劫者取整町の守守根を懸が引きて先浦契へをお天

戦引をめでさ布子一てんりて堪とあませ憂め此  
らや先と見せ世何りとも懸れ其由分一門一家乃  
折延して初者ゆり十九歳の夏江戸へ出立し  
たが懸柄よい火が付やとくいおれ反建率改のたひ  
を懸くとせなうし男もなく又大どく候おられい  
や取親もあられ果ておひさり一家一門も甚相成り  
し非ひとり折延する老もなくいさハ箱の付  
助者よあいのをられまうて追おさる西自あて家  
お先の方へも之を去るあさあし種よて又浦契  
へ懸りたりあまそ今ハ貞ざなれいハ懸れ











四年右の所が是をせよされそやうなるがたく  
母乃内院より金子城送られ一家大長氏の首有  
てきい免ひひ多たれゆめせ終を幼者と云ふのを  
ふくく大なるなりわいおしやと云ふ代後といふ  
大だまけと文好婦一ても益をいひよい  
所証志あり大二交之友の事なれい誠といふ  
多ふまどと云て死も死も何卒先ういふ  
公い勿悔何とてなり大今日誠子一  
たふれいともこのういふと後致て異らるる  
り印板あるやありともき

新成ると潤とこ何て云を考ふ事又ぬもなり  
ぐみそと養れよいぬり〜た結乃思ふが何  
は如を致し重記をそれより史奴源切は世経一  
歳と云ふと云ふ代後と改りてさう〜と云代後  
口なりと云合れと云ふかあり〜と云おもなく一月  
二月と日城と云ふと云ふは西行もどなく出来え  
より人二指おれぬ男也敬の有と一軒愛め  
十番盤も中地か〜と云と云と云方と云  
色いともいふ融書がれあそと云と云人の綱法  
ありそいくの口色信りるいおまきりるわ







右抱られし人やおとされ久左馬守にて又なれり  
百中とくと三振舞も足信より西神也法又静か  
身丸筆よ入るけ梅ちく自身も得んあふ抱へ  
屋一と云われは一人一向け梅いさちと共ふ来話合  
中い支も一埋りせせ逃音取んとかく女取一  
吹雪をせちし候と云ふ大よ赤び西の私をと人  
故へ守りた急よ口のる屋をやそこの程もおほ  
かくもと又いさ来支奴の尻外よぬれも守れど  
右抱へ下さるんと有社筆をせ西を公使れ  
子(来)そ尾一して後を語い久左馬守の代よふれは

八用事調へ大坂へ電りり光臨此もあこと今又云  
及び後を承いりしめ乃新よ久左馬守の方よ  
さあ一が既よ四年の春秋改経よりそら  
新よして公大奉とんけられが一の仕度  
くえより後後を承久左馬守の代よ入て大  
も代りゆてもけして秘花志り結り久左馬  
一人もたれがみちとえ候て承もあくる  
十七歳よぬぬいづくもの事誰か一忍秘  
智恵の付い色の及波後を承男付くんを  
こ一もよ忍承して目能てあせまでも承



新なりし書て送るに後はいさくく種て重よは  
たしと志され丸元と来と正の事代後帳して  
君も夜多来あればいと多杯志せりてい大坂  
おのりてきた多来又ぬの志くち候たうく何とも  
水引せだして目成るるも内親又もみ身ま  
がらん娘も成人のとなれば家督のお後よか  
入り一ふたあやとこの誰のこれ乃と後合する  
内娘おみちい母親の志へおて私い男成持るい  
いやとせいのと教う種とおし毎種よと母親  
もびつらりしてそとや又たせよとおし一

して弱きとゆふと云ふけもちん免角一  
ひとり身で尼でもあふん杯とむ懐めさる  
此をみ先ハ家の毒成事と親父へんをせと先  
もおふとく類よ彼とせは合突乃の成事  
と再えよ勤めてもいふかゆいやくも切を先  
舞のお後もや先して足合守内娘がそゆり  
このと浮世と種と種た又つははと申す後  
とらんていあぢら眼付と一はら姿は目見さ  
ていおひひるおふ種をく扱いと母も親父も大  
方よ推さし一むそくは又ぬの後と種め扱一



成可へかみち成可母を相おかどりの養育も  
云遊角自事の子世孫をなも立んをさか有な  
づり他人よゆづれも孫意たれど男物いやと云  
ん是能もかーをけよハ能いゆはるた梅中  
まおしとるもた一海り夢せ盡るりよハも親  
父及も同じんそ誰れと云んより人梅も能  
發明でつ失神成たれハ成之衆成か督よ之  
れといまご云んりもせぬによりおみちハ信に  
と後おてエ、あれ成之衆と云と云成之世にんそ  
ま何毎よりて夢中れをたあまーやハ信てそよ

いふまのいしとおもあられ成とてとてとあごま  
男物ぬ男たれハ梅中ぬ苦れるりぞめて他人に傷  
このあごこちれぬと云するごのいと親又及も云  
あやまといまらハもそんちあまたれとてさおみ  
めぬおでこごるととごと云此と云く書と云をそ  
云と云及ハ能のうらより書成りごくしして  
志おああ人のこごくハ成之衆と云といと中まを  
それつく結梅かとい思百おけ志申る遊利をけ  
家用で發明で衆和で成之衆をそをさうして中  
むし中ハ能とていそくすはあそそりもこごる

葉のり



まおとんよあはれなぐりてさぐりてふいふ云々の事此血  
筋乃綴るも筆のどくいつそ甥子此之を帝史ぬを  
吸へしともおのふと云むい思くくまのまのまごん  
其まのそ血筋が絶るとおれ志あるあつ私がつまあり  
たと係よむる口書も情い事この世をさふさふしつ  
悪き親ん腹一といふ事成りませぬ多成腹のせり  
そんあつたあつてそなき思たつ海軍をさされて娘  
愛 中 私人を筆でござんたれたあれ人がぞよであ  
後よりと白状志する口書表で所之衆が律儀も破れ  
孫お後格り日成るんで婿礼調を親父史ぬ

も榮城すれいおんが毒び茂き傍が仕合多秋百榮乃  
目お中よめてさくたのい戸の親父多のいひなり  
此牌成ああしておよもてもなれば初め此を  
丁おあれ情いやり不聖者とあひし一年之三  
立の腹をい何処へや不使この世をさおひおあ月  
もたつてさよふ年がきてさふもあつなりおひけを  
母親が云出してい泣涙りおしてさくすれと  
いと忘れぬるもあつてさよつれて七年ふ成  
思不のうに夢を今いふも改まり長崎まで代筆出  
成つとめ二人の目よさまりてさお誓までゆづり

榮城の事



これ鳴呼悲しく〜つゝ急を盡て休きて先初尚  
残ゆらに程〜何れ我を悔り呉しく細く書ん  
母もさむく事切之程程候とこが〜りり〜  
なぐいふおんて讀み初る〜いあ親乃書状可よ  
書也使〜さりとめひそくにされば後書傍も今書  
唐和屋の家々お續して何よ不足なく書ん  
よ付古つきた〜が〜いす表の事おひお〜書  
氣れ不孝と後悔〜何卒初尚の祈願をも  
〜そらくおひお於〜状の重なる候んておどり  
あぐれ不と嬉〜く先押氣いて披いて見れば

初尚ゆきすは悔とあ親父乃自筆おま〜るを  
〜と〜と縁返〜き母の書つて見れば〜さ  
有が〜と死立斗よおひひ〜が悲む〜人の家督  
候つに程〜おみちが切な〜け振替ても初書  
と〜く並つ乃とあこれ〜中もあおむ〜は代  
あらばと〜と〜と〜世を〜と〜と〜と〜  
せん胸〜も〜代重書〜人〜お祈を〜書ん  
人あ〜る〜代お傳と〜も〜あ〜は〜え〜り〜  
及家相續〜も〜代〜書〜い〜ら〜も〜書〜  
〜が〜り〜な〜る〜情〜候〜と〜い〜お〜り〜  
〜親〜は〜

書

書







世に一目の孝もつと先ず生れては来不存ぞり  
せし支親とせ先てけ交立神り及どなぐらも存  
けとんげむべしと云案状をめてこそ扱ひそに  
欠落し江戸表へ下りられぬ支親の喜び大言あり  
ど一家一門乃あ堵月毎の同おとつれ先毎お言ふ  
も懲りられいんちとぬとむらがる能うる屋しとあ  
たしこころぬやゆめ合せ母方の親をてを大家の  
水の中石川治丸後つと云七百石元の娘を室も  
ぞんとおよりして十八歳と成と云むゆる物来  
して奥の善法とするれ結納と送るれと信り

け方八目お夜着て混礼とれば又長崎でいおろそく  
治くふともあぬ大混礼を境け落いませ  
も娘おみちがなかりしとてまけけしとて  
と娘は約をすそとい若くは神ありけおみちと  
云は娘を極夜時お女よて産を産欠落勢し  
より江戸表へ下りきりしと云るゆり合せは先志ありそ  
おら秘して江戸表のりた支親麻乃よりかさお  
ゆきくるよお日産を束後とこ何とあぐら書状  
破壊しておるとちと見えぬれ親えりけ  
来て江戸へ下りくるよまほひかしと志らうり

標







